

「どぶろく・手づくり酒」の本・3部作の復刊にあたって

「ドブロクづくりがなぜわるい!」、そんな「主張」を『現代農業』で掲げたのは1975年(3月号)のことだった。高度経済成長と農業の近代化のもと、農家の生産と暮らし、むらが変わるゆくなかで、「これでよいのだろうか」という思いを強めた農家が教えてくれたのは、農家がもち続けている「自給の思想」とその知恵、技を大切にし、とりもどすこと。その象徴がどぶろくであった。『現代農業』ではその頃からどぶろくの記事を毎号のように掲載。その流れは、各地の農家が登場する「ドブロク宣言」の連載など今日まで続いている。『現代農業』の蓄積を単行本にした『農家が教える どぶろくのつくり方』も毎年、晩秋から冬にかけて注文が増え、版を重ねている。

そんな根強いどぶろく人気の大きな発火点になったのが、1981年発行の『ドブロクをつくろう』である。編者の前田俊彦さんはこの出版と相前後して、国を相手どり、自家醸造を禁止する酒税法は憲法違反と主張して訴訟を起こした。最高裁で斥けられたものの、その主張は世に大きな一石を投じた。前田さんは、「まえがき」で、「すでにながいあいだ酒の自家醸造を禁じられているわれわれ日本人は、そのことがいかに人間の基本的な自由の抑圧であるかを感覚的にわすれており、その自由の回復がかならず日本人の文化の蘇生をみちびくという展望も失っている」と書き、日本人の文化の蘇生のためにこの書を編んだと記している。その趣旨に賛同し、憲法学者の小林孝輔さん、農家であり詩人・作家の真壁仁さんら10人の方々が寄稿。そのメッセージは今でも生き続け、次代に伝え継ぎたいと考えた。

『ドブロクをつくろう』の翌年には、その「実際編」である『趣味の酒づくり』(笹野好太郎 著)を発行した。蜂蜜酒など入門編からワイン・ビール・濁酒・清酒、焼酎まで、それぞれの酒にまつわる文化をまじえてつくり方を指南してくれた本だ。

「どぶろくを民衆の手に」という復活宣言本と、庶民のための初めての本格的な自家醸造酒の実用本。この2冊の反響は大きく、いずれも10万部のベストセラーとなった。そこには経済成長のもと、あらゆるものが商品化され、農家・庶民が自らつくる日常生活文化の豊かさが失われていくことへの無念と、その蘇生を願うたくさんの人々がいた。

この2冊とともに、各地のつくり手たちを描いて話題を呼んだ作品を復刊した。『現代農業』の連載から生まれた『諸国ドブロク宝典』である(その後に出た『世界手づくり酒宝典』と合本)。各地を旅し、ドブロクづくりを楽しむ人びとの暮らしぶり、仕込み方、家族や仲間のことなどを、実際に味わいながら取材し個性的なイラストと短文で描き続けたのは、異色の絵師、貝原浩さんである。貝原さんは「あとがき」でこう記している。

「夢心地のなか、味わって想うことは、どの酒にもつくり手の意気が仕込まれているという事です。酒という生き物をつくり出す誇りを飲むことでした」

2020年3月